

目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究仮説	21
III	研究の全体構想図	22
IV	研究内容	23
1	豊かな読みのとらえ方と指導の工夫	23
(1)	豊かに読むとは	23
(2)	文学教材の読みの指導	23
2	読書生活化に向けて	24
(1)	読書生活アンケートの結果	24
(2)	考 察	24
V	授業の実践	25
1	単元名	25
2	単元設定理由	25
3	単元の工夫	26
4	学習指導計画	27
5	実践例 1	28
6	実践例 2	29
7	授業の考察	30
VI	研究の成果と今後の課題	30
1	成果	30
2	今後の課題	30

＜小学校 国語＞

豊かに読み取る力を育てる「理解」指導の工夫

— 文学教材の読みを通して読書生活へ —

豊見城村立伊良波小学校教諭 平 田 清 美

I テーマ設定の理由

平成7年8月文部省『児童生徒の読書に関する調査研究協力者会議』の報告書に、「子供が読書を楽しむために」の視点として重点四項目をあげている。

- (1) 子供が感動する本を用意しよう。
- (2) 読書の楽しさと出会いをつくろう。
- (3) 読書を楽しむ子供の心に共感しよう。
- (4) 子供の読書活動を広げ、読書体験を深める工夫をしよう。

このことは、活字離れの進んでいる昨今の児童に読書指導の必要性を強く説くものである。すなわち、「おもしろかった、楽しかった・・・」と児童が感動する本を与え、読み方を指導することである。そして、豊かな情操をはぐくみ調和の取れた人間へと成長させていくことをねらうものである。そのことは、新しい指導要領のねらう学力観「心豊かな人間」「自己教育力」の育成にもつながる。

更に、『小学校指導書国語編』の指導計画の作成上の留意点として、「読むことの指導については、読書意欲を高め、日常生活において読書活動を活発に行うことを促すようにする。」と示されている。将来の読書生活の向上、充実に資する「読むこと」の指導が力説されているのである。従って、イメージ豊かに読み取ることは、読書生活を広げるためにも大切な事である。

これまでに、計画的に読書指導を進め、読書による感動体験を積み重ねて、読書の喜びを味わわせる実践を私なりに続けてきた。しかし、読書に興味を持たせるだけで、自己創造を遂げていくような読書活動を促すまでには至らなかった。児童の実態としては、

- (1) あらすじは読めても、行間のイメージ読みができず、場面や心情の読み取りが深まらない。
- (2) 読みが浅く、細かい叙述まで目を向けられないので、自分の感想をまとめることができない。
- (3) 読書は好きだが、国語科の中での読みは好まず持続しない。

という状況がみられた。更に「読書力診断テスト」の結果、読速力や読字力は比較的良いが、語彙力がやや劣っていた。読書へつなげる豊かな読み手を育成する指導が不十分だったのではないかと考える。

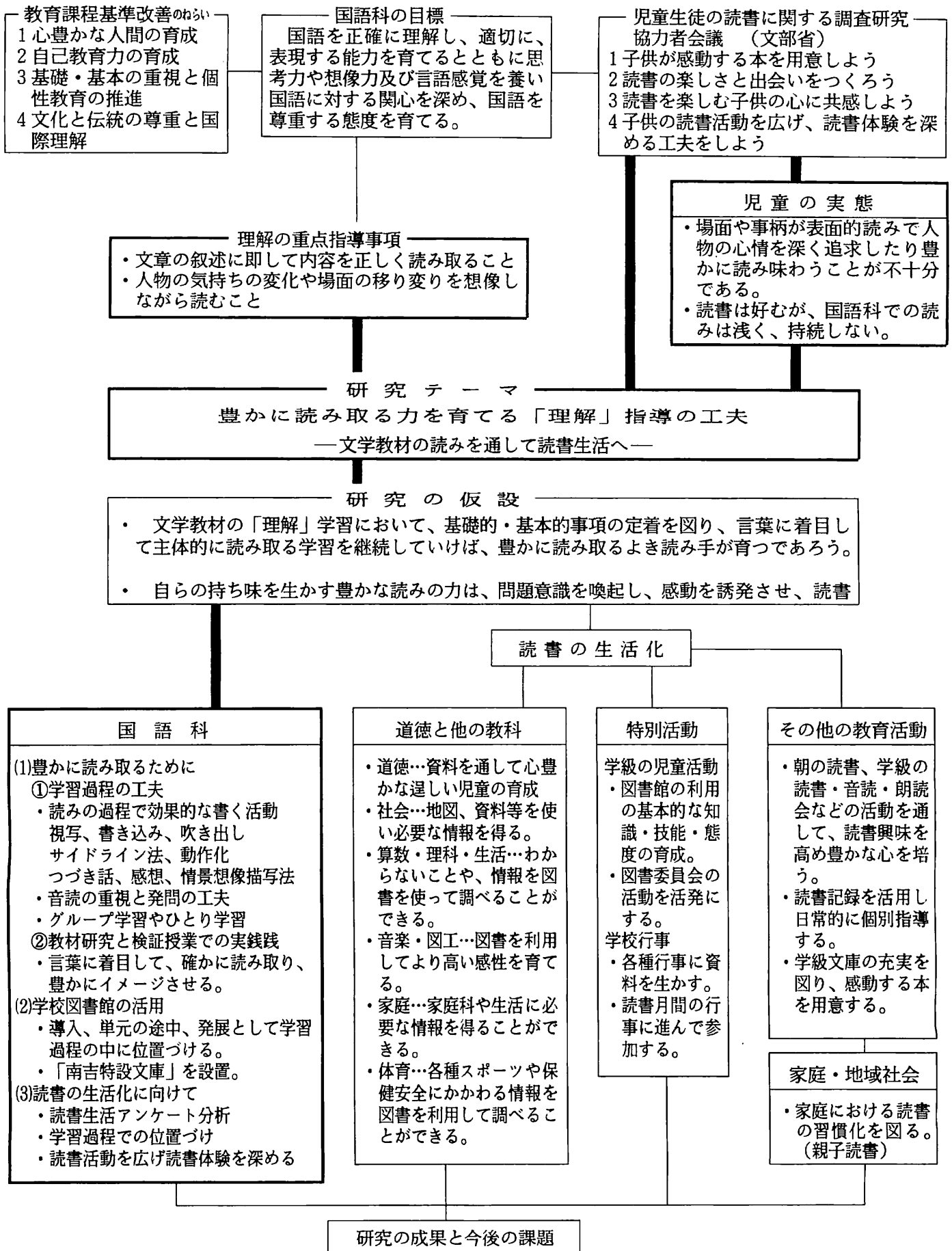
これらの反省に立って、文章を叙述に即して正確に理解する基礎的・基本的技能の定着を図る指導を徹底すると共に、豊かに読み取る理解の学習指導を大切にすることの必要性を痛感した。その際「教えること」と「自ら学ぶ」ことの調和を考えた授業計画が必要である。これまでの児童観を点検し、児童は有能な学び手であるという見地から「読解」と「読書生活」との、有機的な関連を生かした授業を構想し展開することである。

そこで、読書生活を形成する上からも重要な時期にある4年生に、文学教材を叙述に即して確かに、想像豊かに読む力を育てることが重要だと考える。また言葉の教育を基本にして、情操を磨き、文学教材を通して、問題意識の喚起と感動の誘発による読書への関心・意欲を高めて読書の生活化へと志向していきたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 文学教材の理解学習において、基礎的・基本的事項の定着を図り、言葉に着目して主体的に読み取る学習を継続していけば、豊かに読み取るよき読み手が育つであろう。
- 2 豊かな読みの力は、問題意識を喚起し、感動を誘発させ、読書への関心・意欲を高めて読書生活を広げるものとなるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究の内容

1、豊かな読みのとらえ方と指導の工夫

(1) 豊かに読むとは

文学の読みについて、特に学校で文学教育をしなくても自然に習得していくものだから放っていても自分で読むようになるものだと言われたりする。決してそうではなく、むしろ、学校教育の中で、文学作品をていねいに読むという「読みの基本」を指導すべきである。まず、確かに読み取る力を基盤にして、その上に想像豊かな読みが生まれ、叙述をもとに読み手が持っている知識や情報を加えて「豊かな読み」が生まれてくるものである。豊かに読み取るためには、想像する力、考える力、文章を正確に読む力等がうまく働き実現できる。それらの力は個々ばらばらにあるのではなく、学習活動の中で有機的に結び付けて培っていかねばならない。文学教材を楽しく読み、しかも豊かな心情を育てるには、生き生きとしたイメージを描かせ、言葉の芸術として心に響く感動を湧き起こさせたい。

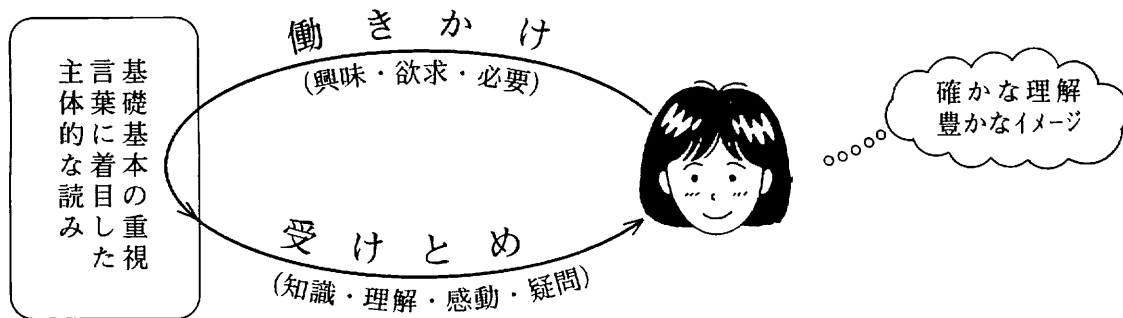


図1 豊かな読みのとらえ方

(2) 文学教材の読みの指導

文学教材は、内容のみが優れているのではなく内容を支えている言葉の働きも優れている。その言葉の働きを学ぶことによって、内容の理解が一層豊かなものになる。更に言語や表現の能力も相乗的に高められていくものと考えられる。確かに豊かな読みの力をつけるために、発達段階を踏まえた各学年の重点能力を把握した指導が必要である。

① 大事な言葉をおさえて読む

作者は作品を書くのに言葉を十分吟味する。私達が文学作品を読んで行くうちに、心に残る言葉や引きつけられる言葉に遭遇する。また指導する際にどうしてもおさえなければならない言葉もある。しかし、どの言葉も同じように立ち止まり指導するわけではない。「主題」「場面や情景・登場人物の性格心情」等との関わり指導の軽重を考えていかねばならない。読み手は表出された言葉を手がかりとして読みを深めていく。ア、人物を表す言葉、イ、情景を描き出す言葉のとらえ方、ウ、作品の主題につながる言葉の読み取らせ方、エ、言葉のもつ働きの気づかせ方等を常に意識し学習者の言語能力の実態を踏まえつつ指導することである。

② 作業学習をとり入れる

本時の目標に照らして一人一人の児童が興味を持って、生き生きと主体的に学習に取り組むように、確かな読み取りの手だてをすることが必要である。教師中心の一問一答式の話合いで一部の児童が学習者になって、にぎやかに発表することで授業は成功したように見られた。しかし、一握りからはずれた児童も有能な学び手であることを忘れてはならない。個々の課題を明確にした作業学習を取り入れて、一人一人が「学ぶ喜び」を味わえる主体的な学習を展開することである。教材の内容及び、その教材で培うべき能力が育つ作業学習を精選し、指導過程に適宜織り込むことで授業の活性化を図る。そのことは個を生かす教育の充実にもつながる。確かな読みを支える作業学習を取り入れることで、論理的思考力を深め、的確な判断力と豊かな表現力が生まれる。すなわち、豊かな読み手を育てる手がかりとして期待できる。

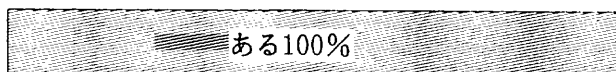
2 読書生活化に向けて

(1) 読書生活アンケートの結果（質問1、2、3、4、7、8のみ抜粋）平成8年1月実施、4年4組 30人

1 あなたはこれまでに本をプレゼントされたことがありますか。



2 あなたはこれまでに「こんな本を読んでごらん」と誰かに進められたことがありますか。



3 あなたは学校図書館以外から本を借りたことがありますか。



4 あなたは4年生になって本を買ったことがありますか。（2学期までに）



7 読書したらどんなことがあるのだろうか。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| ・漢字を早く覚える 5人 | ・書かれている文の意味がすぐわかる 4人 |
| ・頭が良くなるというし、多読賞ももらえる 5人 | ・本がすらすら読める 3人 |
| | ・作文がうまくなる 3人 |

8 あなたが本を読みたくないのはなぜだろうか。

- | | |
|---------------------|------------------|
| ・読むのが疲れてなんぎになる 6人 | ・本はおもしろくない 3人 |
| ・内容がわからない 4人 | ・図書館に行くのがめんどう 3人 |
| ・絵は好きだが字はおもしろくない 3人 | ・目がいたい 2人 |

(2) 考 察

- ・ 質問1と4は主に＜生活＞との関わりである。日常生活の中で読書の定着は薄く、大人を含めて読書に対する関心は低い。自ら本を買うこともあまりないようである。読書環境作りからも家庭や地域での読書意識の高揚が求められる。
- ・ 質問2は主に＜人＞との関わりである。「だれかにこんな本を読んでごらん」と進められた経験が全員である。それはほとんどが学校内での教師や図書館司書の声である。質問9で「本をプレゼントされたい」と望んでいる児童は86%もあり、この声も大切にしたい。
- ・ 質問3は＜図書館＞との関わりである。学校図書館は利用するが日常生活の中でどの程度図書館を意識しているかということである。近く的那覇市立小祿南図書館利用が多く、豊見城村立中央公民館、県立図書館もある。今後は隣接する村立中央図書館の利用も意図的に習慣化させたい。
- ・ 質問7は読書することの良さについてである。読書はためになることをよく理解している。
- ・ 質問8は読書しないホンネである。ほとんどの児童が感動した本や忘れられない本を持っているのに読まないのは、読書をするきっかけや入口が見つからず迷っているだけである。児童が読書を楽しむためにもやはり手だてが必要である。

読書アンケートより、児童は読書することの大切さを充分認識しているのである。「本を読まない」として「つかれる、おもしろくない、わからない」がいかに取るに足らない理由であるかわかる。本当は読みたいのである。だから児童の知的欲求に答えてあげねばならない。放課後や休日にスケジュールが大人並みに詰まっている現代っ子が読書の時間を日々の生活の中で確保することはますます困難な状況になってきている。このような現状において国語科の授業で確かな読みの力をつけ、豊かな読みへの発展とつなげ、読書の楽しさを実感させたいと考える。あせらず、むりせず、望ましい読書環境を作り、生活化に導きたい。

V 授業の実践

- 1 単元名 人物の気持ちの動き (『ごんぎつね』新美南吉作 光村4年下)
—南吉展を開こう—

2 単元設定の理由

(1) 単元について

これまで児童は下巻第一単元「一つの花」では、書き込みの方法と課題作りの学習を進めた。登場人物の気持ちや場面の様子を思い描いたり心の動きの読み取りを学習してきた。しかし、言葉をきめ細かく読んだり、人物の生きざまにふれたり、美しい情景を想像するまでには至らなかった。

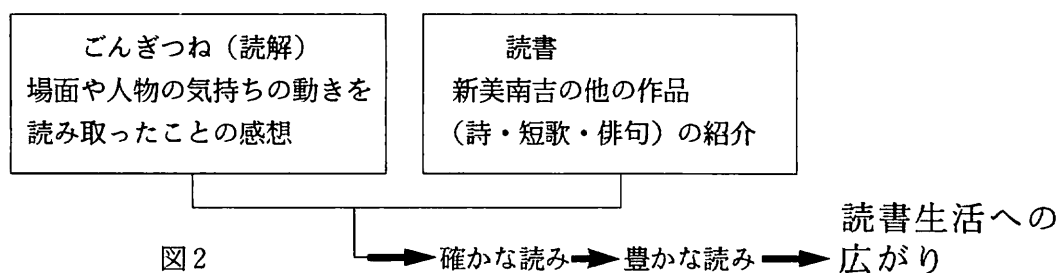
読書生活を形成するためにも重要な時期にある四年生に、児童の心をゆさぶる文学教材にふれさせ、言葉を通して想像豊かに読み味わせることが大切である。そのためには、読書の楽しさや喜びを体験させ、心情を豊かにさせると共に、読書の生活化を図る必要がある。

この単元では、文章展開がわかりやすく、児童が想像力を働かせて読める「ごんぎつね」を位置づけた。南吉作品は日常生活にありそうな一コマの風景が、身近な生活の様子がやさしい言葉で表され暖かくて親しみやすい教材である。更に、繰り返し読むごとに、人間としての心を考えさせられる作品でもある。すなわち、読書の生活化に向けて取り組みやすい単元だと考える。また、言葉にこだわらせて主体的に読み、人物の微妙な心の動きを感じ取らせるためにもこの単元を設定した。

(2) 指導について

本来、児童は本が好きであるといわれている。しかし、児童の読書離れが叫ばれて久しい。児童の生活の中で文学作品にほとんど接していないのが実情である。生活の中で主体的に文学作品を読み進めていく児童を育てるためには、理解と読書の融合を意図した単元を工夫する必要がある。興味を誘発する読みだけに終わらず、作品を支えている言葉を大切に学習を進め、読書の範囲を広げる。児童が喜んで主体的に学習に取り組めるように学習課題を設定し、解決していく学習活動を展開する。ごんの行動や心内語、情景の描写から重要な語や文をとらえ、書く作業を取り入れ、一人一人の児童がイメージ豊かに想像できるような読み取りをさせていきたい。

「南吉展を開こう」は、学校図書館を活用した読書活動へつなぐ学習の工夫である。他の南吉作品にも、もっと今の児童の心を揺り動かしてくれる出会いがあり、読書生活の広がり期待するのである。図2は、教材と読書の融合から、読書生活への広がりをとらえたものである。



読解と読書との有機的な関連を求めるためには、どちらも大切にして指導を進める必要がある。読書に重きを置くと読解の力にやや不安が残るので、年間指導計画の中でどの時期にふさわしいかを検討し、総合的な国語力が伸びるように配慮する必要がある。

(3) 児童について

- ① 「一つの花」の学習では、初発の感想で主題にふれた児童が30人中9人いたが、物語の筋だけを書いたのが4人いた。ほとんどは部分だけの感想に終わっている。
- ② 物語のあらすじがわかった時点で満足し、大事な言葉を見つけて、イメージ豊かに想像することが弱い。だから、言葉を大事にして読み進めることに興味を示さない児童もいる。
- ③ 人物の気持ちを考えて読む児童もいるが、読むことそのものに困難な児童もいて、個人差が大きい。

3 単元の工夫

(1) 教材との出会いを大切にす

「ごんぎつね」は、昭和7年、新美南吉が19才の時に書いた作品で、児童文学の古典とも言える名作の一つである。民話的舞台を背景に繰り広げられるこの物語は、児童が好む教材でもある。小ぎつねを主人公にしたメルヘン的な描き方である。主題は、人に対する好意、善意が相手に通じないもどかしさや、理解しあうことのむずかしさを表現したものが多い。

物語は6つの場面から構成されている。5の場面までは「ごん」の視点で、6の場面だけは兵十の視点の文章表現である。どの場面も比喩表現や遠近法で生き生きと描かれている。また、色どりも鮮やかで豊かにイメージできる文章表現で、言語能力形成にも適した教材である。

(2) 言葉にこだわらせながらイメージ豊かに読ませる

文学作品は、言葉によって形象化された芸術である。その言葉には読み手に場面の情景、人物の様子などを想像させ、情感をゆさぶる働きがある。

「土間にくりが固めて置いてあるのが…」の文では、ただそこらに置いたり、投げ出したのではない細やかなごんの心づかいを表している。そんなごんがいじらしく感じられる。文学教材の読みの指導においてはそのような語句や文を見つけ、その意味することを理解させる。そして言葉に即して登場人物の様子や心情、情景描写等を読み取ることである。読み取ったことをもとにして豊かにイメージさせることである。このように文学作品は、読み手の内部に様々な対話を引き出す装置のようなものである。教材も児童に矛盾や疑問を感じ、それを追求していくことで、ある道筋が見えてくるような仕掛けである。装置や仕掛けから児童にどのような言語体験をさせるのか、どんな体験が成立するのか考えさせるのである。

(3) 豊かに読ませるために「書く作業」を取り入れる

理解学習に書く作業を取り入れることは、自らの感性と知性で感じたことの疑問が具体的になる。しかも自己の力を発揮する主体的学習が可能で、言葉を意識したより深い読みへと高められていく。そこで、一人一人の児童にその子なりの読みを生み出させるために書き込み学習を取り入れた。まず初発の感想や書き込みから出た個人課題をもとに、場面ごとの課題や全体の課題をしぼる。教師自身がどの課題を残せば教材のねらいが達成でき、豊かな読みにつながるか絶えず念頭に入れる。課題意識を持続させるために読みの視点を与え、その手段として書く作業を取り入れる。従って教師は明確な意図を持って学習の作業化を進める。「書く作業」は、言葉にこだわらせながらイメージ豊かに読ませるとともに、論理的思考力を高めることもできると考える。また、文学教材における書く作業は、児童の表現力を支える生きて働く力となるものとする。

(4) 読書の生活化に向けて

① 導入段階で広げる

導入段階に新美南吉の記念館について話をする時間を設け、作者について知らせる。これからの単元学習に対する具体的なイメージを持たせ、有効で実質的な学習計画を立てられるようにする。多読の単元として一枚絵本や分冊にする。更に、家にある新美南吉の本を持ち寄り「南吉特設文庫」を設置し、いつも目に入る所に本を用意する。

② 学習過程で楽しむ

学習過程で、南吉の作品をもっと読みたいという気持ちが高まることが十分に予想される。思いを大切にして、「南吉作品紹介タイム」やブックトークを取り入れる。読んだ足あとが目につくように、教室の壁面の一部を読書コーナーとし、読み深めながら表現活動ができるようにする。

③ 単元のまとめとして深める

「ごんぎつね」の確かな読みから、豊かな読みへの発展として、南吉展を開く計画を立て、同じ課題を持つ仲間と読み深めて、活動表を作成し意欲的に取り組ませる。まとめに読書座談会をもち、友達の想像や思いを聞いて、自分の想像もふくらませ、読書活動の活性化を図る。

4 学習指導計画

段階	過程 時	学 習 活 動	重 要 語 句	指導のねらいと支援の方法	読書への手だて
導 入	1 2	- 教材との出会い。 - 単元学習計画を立てる。 - 初発の感想を書く。 - 感想から課題を考える。 - 場面ごとの課題 - 自己課題	- 人物の気持ちの動きを - 作者 新美南吉 - ごんぎつね	- 作者との出会いを大切に。 - 単元学習を、主体的に展開させるため、見通しと目的を明確に持つようにさせる。 - 興味関心を生かしながら問題を出させる。 (感想文法、問題作り法)	これまでの読書生活を振り返らせ、生活の中で読書意欲を高める。
展 開 段 階	3	- 第1場面を音読する。 - ごんの境遇、性格やいたずらぶりを読み取る。	- 独りぼっちの小ぎつね - しだのしげった森の中 - のあな - 夜でも昼でも - いたずらばかり - ほっとして - ちょっといたずらが	- 場面の様子や人物の気持ちを想像しながら読むこと。 「独りぼっち」と「小ぎつね」をつなぐと、ごんはどんな性格のきつねだと考えられるか。 (視写法、朗読法、紹介文)	- 図書館で、新美南吉の本を選んで読む。 - 読書紹介として読んだ作品の感想をカードに記録させる。
	4	(実践例 1 P28 記載)			
	5	- 第3場面を音読する。 - ごんはどうして、つぐないをする気になったのだろうか読み取る。	- おれと同じ、独りぼっちの兵十か。 - つぐないに、まず一ついいことをした。 - これはしまった。 - 次の日も、その次の日も、その次の日には…	- ごんの行動や心内に着目して読み、ごんの気持ちを想像して、まとめさせる。 - 人物の行動や心情、情景、描写を表すキーワードを見つけ、まとめさせる。 (サイドライン法、吹き出し法)	図書館で南吉の本を見つけたり、家から特設文庫に持ち寄ることを奨励し紹介する。
	6	- 第4と5場面を音読する。 - ごんの善意が兵十に通じないやせなさを読み取る。	- 二人の後をつけて - いどのそばにしゃがんでいました。 - 兵十のかげぼうしをふみふみ。 - つまらないなあ - おれは、引き合わないなあ。	- 兵十に対する償いの気持ちがますます強くなり、兵十の親近感へと変わっていることに気づかせる。 - なんとか分かってほしいごんの気持ちを言葉に着目して、読み取らせる。 (動作化法、吹き出し法)	- きつねの出てくるお話をさがそう。 - 特設文庫の中から、ブックトークをする。
	7	- 第6場面を読みごんと兵十の心の通じ合いを読む。 - 最後の力をふりしぼって、うなずくごんの気持ちを読み取る。 - ごんがうたれた後の情景について話合う。	- その明るくする日も - ぬすみやがった - ごんぎつねめ、また… - またいたずらをしに来たな - ごんおまえだったのか - ぼたりと取り落とした - 青いけむりが…	- 作品全体を視野に入れて、ごんと兵十の心の交流を読み取らせたい。 - クライマックスにおける人物の心情を考えさせる。 (情景想像描写法)	6場面のつづき話を書く。 「語り終えた茂平じいさんは…」 - 読書案内コーナー
	8 9 10 11 12	- 南吉展に向けて調べることを決める。 - 各コースごとに分かれて学習を進める。 *ごんぎつね村コース *音楽物語コース *新美南吉の短い人生 *クイズコース *昔絵ことば辞典 *南吉文学かるた - 中間発表会をする。 - グループごとに発表の練習をする。		- 南吉の作品の中で一番感動した作品を選び、発表する。 *「がちょうのたんじょうび」 *「おじいさんのランプ」の部屋 *「ごんぎつね」のペープサート - 作業分担を確認し、役割や準備など責任を持たせる。 - 聞く人を常に意識して、分かりやすく発表するようにする。	- 文学作品を読むことに対する目的意識を明確にさせる。 - 読んだことのない作品は、新たな読書意欲を持たせるようにする。
終 末	13	(実践例 2 P29 記載)			
	14	「ごんぎつね」からこれまで想起させ、トークタイムをする。 「ごんぎつね」の感想を書く。 - 南吉展の感想を話し合う。 - 単元学習から学んだことをまとめる。		- 南吉展の成果や課題を話し合い、次の学習へとつなげる。 - 自己評価、相互評価	- 単元を通して読んできた本を振り返ると共に、今後の読書生活へと期待と意欲を持たせる。 (読書座談会)

5 実践例 1

(1) 目標

兵十のおっかあが死んだことを知り、ごんはどのようにかわただろうか読み取ることができる。

(2) 展開 (4/14)

◆教師の支援 ■読書への手だて

過程	学 習 活 動	教師の支援と評価
つかむ 3分	1 前時の学習の想起と本時の学習課題を確認する。	前時の学習内容を振り返り、今日の学習課題を確認する。 ・舞台設定とごんのいたずらぶりを思い出す。 ・今日の学習課題を斉読する。
	兵十のおっかあが死んだことを知って、ごんは何を考えたのだろう。	
ふかめる 32分	2 第2の場面を音読する。 学習課題に基づいて、ごんが見たこと、ごんがしたことを読み取りサイドラインを引く。 ・十日ほどたって 「ふふん、村に何かあるんだな」 弥助の家内…おはぐろ 新兵衛の家内…かみをすく おおぜいの人…よそいきの着物を着る。 ・お屋がすぎると 村の方から、かねがカーカーン そう列の白い着物がちらちら 話し声も近くなりました。 そう列が墓地に入ってきました。 ひがん花がふみ折られていました。 ごんは、のび上がって見ました。	◆第2場面を読み、時間が移り変っていく文頭の言葉に気をつけながら、ごんが見たこと、ごんがしたことを見つけさせる。(サイドライン法) ◆ごんの行動に視点をあて、視覚に訴えた書き方をさがす。 兵十の母親の死を知るまでのごんの行動を整理させる。 ◆兵十の前の様子を細かく読み取り、小さいものを大きく取り上げる書き方の良さに気づかせる。(ズームアップ) 兵十のうちの前→家の中→かまどで火をたく→大きななべの中
まとめ 10分	・そのばん ごんがほらあなで考えたことを話合う。 3 今日の学習場面をごん日記や吹き出しに書いて、発表する。 4 南吉の本の紹介をする。 5 学習振り返りカードを書く。	◆六地蔵のかげからごんが見た様子をイメージ豊かに想像し美しい情景描写を味わわせる。 ・ごんのいる六地蔵の前に近づいて、遠ざかっていく様子を描写の中から読み取り、色あざやかな表現に気づかせる。 ひがん花が赤いきれのように 白い着物を着たそう列の者 赤いさつまいもみたいな元気のいい顔 ◆うなぎを食べないで死んだ母親に対するごんの気持ちはどうなったのか読み取る。今日ごんが見たことをもとに、ごんの気持ちをよく考えさせる。(ごん日記、吹き出し法) ◆ごんになりきって工夫して音読させる。(音読法) ■読書案内カードをもとに、本を紹介し、学級の掲示板にはってお互いの読書意欲を高める。 理解の能力 第2場面の様子や情景をとらえ、ごんの心の動きを読み取ることができたか。

(3) 読解過程に位置づけた書く活動 (児童のノートより)

<第2場面での吹き出し>



<第6場面でのつづき話>

そのあとごんは
四年四組
城間 綾香

兵十はごんに近づきました。そして
そのごんの顔をのぞきました。するとごんの口
からがすれた声で
「いままでのいたずらをゆるしてくれだー」
と言いました。兵十はうなずきました。
そして、兵十は家の庭にごんをうめて
やりました。
ごんの命日にはわすれずに山のくりや
まつたけを置くといいことです。

(1) 南吉展に向けての取り組み

日のおHP (4)組 (2)番 氏名(上原、陽子)

＜読書案内カード＞



♥表現 ♣意欲・態度

— 29 —

＜音楽物語コース＞

星が笑人 詩 新美南吉 曲 岸川 哲子・伊達 愛

＜ごんぎつね村コースの写真＞



7 授業の考察

- ・ 豊かに読み取る手だてとして、多様な学習活動の工夫をしたことで、学習意欲の持続ができ、主体的に学習に参加できた。
- ・ 文学教材の「理解」学習から読書生活へつなげるために、「南吉特設文庫」を用意した。どの児童も作品と多く出会うことができた。さらに作品紹介から南吉展につながったのもよかった。
- ・ 授業後、「もっと南吉の本を読みたい」「昔のことを調べたい」という児童の感想から、読書生活への広がりが見られた。

VI 研究の成果と今後の課題

1 成 果

- (1) 国語教育は、言語の教育である。この前提のもとに、確かな読みの基盤を作り、豊かな読みを育てる指導の工夫として実践した。文学教材の読みの指導において、学習課題を作らせたり、単元一冊ノートを使い、書き込み学習は初めての試みであったが、児童はどの時間もねらいをしっかりとち意欲的に学習することができた。
- (2) 豊かに読み取るために、書く活動を取り入れたので、児童は主体的に学習に参加できた。そのためしだいに文中の言葉に着目するようになり、イメージ豊かに読み進めていく児童が増えてきた。
- (3) 学習課程の中に意識的に図書館利用を位置づけたことで、発展的に多くの作品と出会うことができた。あらかじめ用意されたテキストを読むという学習だけでなく、児童の実態に合わせて読解と読書を有機的な関連を求めたことで、児童の新鮮な学習意欲を引き出すことができ、本そのものに興味関心を持たすことができた。

2 今後の課題

- (1) 豊かな読み取りの指導の工夫として、書く活動を取り入れたが、個人差があり時間がかかるのでふだんから、書くことの方を多くして、短時間に書けるようにしたい。
- (2) 着実に読みの力をつけるために、指導体系を把握し、一年間を見通した学習指導で、繰り返し読書の発展につながる読みの力をつけるようにしたい。
- (3) 読書の生活化においては、常に児童の身近かで楽しいものと意識されるように、学習活動の中に組み入れていきたい。

＜主な参考文献＞

橋本・菊地明 編著
府川源一郎／長編の会
石田佐久馬 編集
西郷竹彦 編集

『新版国語指導全集 読書指導』
『読書を教室に』
『文学教材でなにをどう学ばせるか』
『新美南吉を授業する』

日本教育図書センター 1993年
東洋館出版社 1995年
東洋館出版社 1991年
明治図書 1992年